〔阿波名所圖會上〕鳴門　阿波淡路の境にして、阿波の國板野郡撫養浦にあり、門の間十七八丁、大海より滿來る潮も、中國の海より干る汐も、滿干ごとに此門にあつまれば、汐のはやき事矢のごとく、水勢のつよき事、盤石の轉倒にたとへんもさらなり、されば順水にあらざれば、風帆も此門を渡事かたし、此門の間阿波地より淡路潟へ、瀨の巖つゞきて見ゆれば、水底深しとも見へざりき、瀨の左右は深き事底を去らず、此門干汐の時は一方ひくゝなりて、一方より落る水瀧の如く、滿汐の時は、大海より汐みちくれば、瀨あたりて立のぼる、浪落ればことゞく渦となる、其高く卷あがりたる白浪に、朝日影のうつろふ景色、また門わたる舟の汐にひかれて、飛鳥のごとくなるありさま、畫にもいかでとおもふ絶景なり、尋常の汐の滿干だにかゝる景あり、三月三日の汐干は、海原大に高下ありて、倭國第一の瀨戸なれば、鳴門の汐干とてなだゝり、

〔土佐日記〕卅日〇承平五年一月　雨風ふかず、海賊は夜あるきせざるなりときゝて、夜中ばかりに船を出して、あはのみとを渡る、夜中なればにしひんがしもみえず、おとこをんな、からく神佛を祈りてこのみとを渡りぬ、

〔扶桑殘葉集十四〕觀濤記　天明改元四月　加藤景範

磯よりさし出たる島を、あふの島といふ、そのさきより大毛山にかゝり、岨道を廻りて峯にのぼれば、海は鏡のやうにかゞやく、かく波風のなぎたるを正民見て、舟にてくべかりけるものをば、船長が何に得はからぬかたひ也けりとつまはぢきす、此峯のはてなる所に茶亭あり、こゝに居て見れば、こなたの磯はなれたる所に、峙てる島をはだか島といふ、むらいなる名は、たがきせけるぬれぎぬにかあらん、松おほく去げりて、あらはにもあらず、その南に黑き岩山をとび島といふ、東は淡路島にて、このひた表にむかふ、峯の西のかたへつらなり出たるが、そのしま根と、はだか島と一里ばかりなるが、あはひ岩瀨のやうに白浪さわぐ所鳴門なり、そのあたり渦まく、おも